

養生訓

七



養生訓卷第七

用茶



人身病をきこ申わすも病あまは醫治せしむこ
 て治を求む醫の上中下の三品あり上醫を
 病治知り脈治知り茶治知るは三知を以て病を
 治して十全の功ありまこと茶世に寶ありてま
 功良相よつげ申右人の言のどくもト醫ハ三
 知の力ありまよ茶治投トて人をあやます事
 多し茶の補浮密熱乃良毒の氣偏ありま氣れ
 偏治用て病治せしむあふ参茶乃上茶とて

病小用也べつと云ふ病は愈えしむるに
必すもつと云ふ病は愈えしむるに
たぐ益ありと云ふ病は愈えしむるに
醫あり病と脈と薬はあらずと醫より及んば
と云ふ薬は皆氣の偏よりしてあり月也べつと云ふ
事はあらずと云ふ病は愈えしむるに
書よ班固曰有病不治者皆中醫云云と物
わきまをとりて病は治るべしと云ふ事
と詳しと云ふと云ふ薬は皆氣の偏よりしてあり月也べつと云ふ
事はあらずと云ふ病は愈えしむるに

と云ふ治せざるの中品の醫ありと醫の病ありと薬を
用て人をあやまると云ふ事と云ふ故に病ありと
病ありと云ふ病は愈えしむるに
たぐ益ありと云ふ病は愈えしむるに
と云ふ薬は皆氣の偏よりしてあり月也べつと云ふ
事はあらずと云ふ病は愈えしむるに
書よ班固曰有病不治者皆中醫云云と物
わきまをとりて病は治るべしと云ふ事
と詳しと云ふと云ふ薬は皆氣の偏よりしてあり月也べつと云ふ
事はあらずと云ふ病は愈えしむるに

うらみ初らばさうして病を憐んで病よ治せすこ
 以て病あはれども治せざるハ中あつて醫ありと
 さす未だ名言と病病人も亦け疑と信とある
 て病せざる業は根と云うす世俗の病の由は
 いふん事は求て醫の良法とあるがは庸醫れ
 業は求らるゝにのんてうのて身とをこゝろも
 頭めとととつてども実ハ身を害とる也古語
 曰病傷狂可療業傷最難醫治るべ業との
 り治らばそらとるべし孔子も病を治るべし
 賜もつとて病を治るべしとてかめ病はさうは疾

とけしむ病はかり聖人の至教也と云ふ今
 病は病を治るべき法を精しく察せば病は
 病を治るべしとて業を投と業は皆偏毒のれだ
 ねと云ふ
 孫思邈曰人故を病を業を解べうは病は
 病を治るべしとて病生は
 劉仲達が病書をよ疾わのてりり醫ありと
 の中は病のいゆる病を治るべしと云
 しとて醫の良法と云うとて病生は
 く業を治るべしとて病を治るべしと云

とらうははるゝ病なると時只穀肉を中やふ
 る穀肉の脾胃をややふよふ病と事
 考其の補よまされつゝある古人の言は茶補
 の食補よまらふとらり老人の病は食補と
 茶補いやし申は均らう時月由へ
 茶紙のまびつてたのづらうゆゑ病多し是を
 ぞみより茶を用て茶よあそられて病と食
 とはまらけ久しく茶とて死よつゝと亦多
 し茶紙用を申つゝしへ
 病の初發の時病をゆふ見付どんびざらよふく

茶と月由べうら治く病紙紙難あては茶を
 用ゆへ一法病の甚しくあふまゝハ初發乃時
 茶らうらよまらあやまのて病紙よむけ茶を
 用ゆは治へがてあふ療治の習ハ初發より
 病あつゝハまゝ良醫をま秘して治と一病よ
 つまらまゝ治とれど病やうかりて治へが下
 病紙よ治とらうか
 血處扱が湯生乃道ありて長生乃茶ありとら
 養生乃道ハあまじまれ付らばのらとま
 とら茶とて養生ハあまじまれ付らる天年とら

道なり古の人巨^大樹^大者よたがうりされて長生
 の薬として用ひし人多うりしとぞまゝかか
 りて薬毒よまをり人なりも長生の薬か
 らせぬ一く昔芳しく長生の薬として用ひしと
 量なり信とくくび内慾と云ふや一知邪と云ふ
 記后とつし一み勅静と対し其の生れ付る天年
 をたのめづし一も喜生乃道行るなり^五五^十枝^十枝^十
 洗ハ子古の述^述を^をやま^まり^りけ^け洗^洗信^信と^とべ^べ一^一凡^凡う^うこ^こぶ
 べ^べと^とう^うこ^この^の信^信と^とう^うを^を信^信と^とる^る一^一述^述と^とく^くる^るこ
 録^録の^の薬^薬よ^よ好^好名^名わ^わり^りま^ま修^修わ^わり^りの^の紙^紙用^用ひ^ひて^てさ^さ

ぶる^ぶり^り性^性わ^わること^{こと}偽^偽薬^薬と^と紙^紙用^用由^由へ^へう^うび^び偽^偽薬^薬と
 ハ^ハま^まあ^あら^らう^うる^る似^似せ^せ薬^薬也^也拍^拍播^播と^と根^根鼓^鼓と^と一^一雞^雞腿^腿思^思と
 柴^柴胡^胡と^とさ^さる^る乃^乃好^好く^く又^又薬^薬の^の良^良名^名よ^よ紙^紙用^用由^由べ^べ一^一ま
 痛^痛よ^よ宜^宜し^しと^と良^良方^方と^と一^一と^と薬^薬性^性わ^われ^れを^を功^功を
 一^一又^又薬^薬の^の製^製法^法よ^よ紙^紙用^用由^由べ^べ一^一薬^薬性^性よ^よれ^れを^を修^修
 治^治法^法よ^よ省^省け^けを^を終^終り^りた^たと^と一^一合^合拍^拍と^と一^一と^と地^地よ^よ
 且^且対^対症^症よ^よつ^つと^と味^味の^の一^一所^所わ^わり^り又^又よ^よと^と一^一拍^拍と^と
 料^料理^理わ^われ^れを^を味^味あ^あく^くし^して^てを^をれ^れら^らぶ^ぶが^がや^やと^と
 然^然る^る薬^薬性^性の^のよ^よと^とを^をら^らび^び用^用ひ^ひし^し製^製法^法と^と一^一
 くと^と一^一

いふもの味色これと煮る法らういておれ味わ
ち、良薬と煮法ち久の験ゆいけ故薬と煮す
る法よよく心用ゆべー文史とわゆるうゆる火也
火火とつとと火と文史火とつとつとすやち
うゆるゆるり記からん乃火と風室を愛敬し合
滞と消導とる類乃剛劑を利薬と云利薬と
火火とて見んじてよくにあげやち熱せとる
時生氣の化よとを服とべーおけとれど薬力は
よくして邪氣よくらちとるよく煮して熱
とれど薬よ生氣化力からしてよく邪氣よち

くく補湯はやうゆる文史とてゆらやふ久
しく煮しつとよく熱とべーおけとれど
純補しぐくくく文史と利薬は生よ宜しく熱よ
宜しぐくく補薬熱よ宜しくして生に宜し
くすちとるべー薬成煮とるにけ二法あり
薬劑一服大小の別中なる在法と考久の中辨
の去宜よくあいてお不及かちとるべー近古仲并
家よ日本のお地民俗の風氣よ宜しくとて薬
の重さよ八分と一服とす醫家よわたりて一と一
張とく今のお世醫乃薬劑ハ一張の重さよ七

をり一々に起る一々に多る六條之申及乃
茶利を醫云と考ふるよ一振二より十より
東地ハニを月して一服と申事河の中及人
煎湯のみを用事ハかく茶一服ハこれ煎汁
甚法して茶カつて痛を治る事ありと云
御るよ日本ハ茶飲ハ小服ナラハ何れや曰日本の
醫乃茶利小振ナラハ三あり一ハ中華の人
ハ日本ハ生質健ハ腸胃つても右飲食
多く肉と多くを日本ハ生つても高強ハ
て腸胃よく食よくゆく事ハ羊乃肉と食

よ宜くうらぶらゆと物とらよ宜くハ茶ハ茶
利を蓄り小服ハ酒合と云茶一振と云れ
申及乃人日本ハ人同く是人ナラハ小強弱ハ
うらる日本ハ人さやどたよ作る事今ハ醫ハ用
る茶利の大ハ此れハ二ハ一ハ此れ一ハ此れ
ど御通て日本ハ茶小服ハ事ハ此れハ
ばと云人あり一統よ或人の曰日本ハ茶利と云
ころよよたよ物多しとるハあると云れハ
國の美利ハ我ハ此れを愛て價をとり大服ハ
此ハ費多しと云ハ此ハ茶利ハ大振ハ合せ

古今多醫の茶種を析みて多く用ひず終る
る小腹痛しと古來習ひ傳りて富貴人此茶
とくとも小腹痛しすと云はれ又曰日本此醫
の中華の醫も及ぶ故に茶方を用ふる人多くハ
多病は適^適あせるとん事を畏るはたゞ^{ハツ}決定して
一方を大振りて用ひぐとある大振りて多病は
愈せされど之にして甚だ苦みかさん事なると云
え小腹痛用由茶を病に愈せしむと云ふ小腹痛
もハ大なる害ありあるをいふ小腹痛とて是目と云
秘して小腹痛はむね一ありと古來小腹痛用由と云

是又一説くば一説よりして日本此茶古來小腹痛
なりと云

日本人の中夏の人より健なりて腸胃のつよこに於て
して茶を小腹痛と云ふ宜しくとも是形體大小
お似て是ハ強弱の別ありて中夏の人ハ
中夏より多くはるや細くは茶劑を今かたよと云
が宜しくと云ふ一たとい昔よりありて小腹痛
なりとも是のつよを別ありと云ふは今
の時醫の茶劑を今より一振りて小腹痛
と云ふと標^標書^書の力なるべし一光利湯を用ふ

病の如風寒、肌膚をやがり大熱をせし、内飲含
腸胃は寒り積滯のまじり、鬱結の毒、
肉の邪氣をばけし、痛をわ小切の薬力を以て大
なる病邪よりちかき事なるとを、
車訖の穴に救ふが如し、又小兒を以て大敵よりちかき
こころの薬方、
小兒の薬は、
ひとと人服する事、
ひとと死なば、
ひとと死なば、
ひとと死なば、

この如く況らうよ、
今いそくにきんをく、
張弱よりして増減を、
補茶一袋の分量ハ、
補茶つうえやと、

なり是又人の大小強弱によりて増減とて又及
補兼用の薬方あり一服一々二三をとり一々七分
よいつるべし

婦人の薬は男子より小服又厚く利湯は一服一々
二分より一々八分より補湯は一々より一々
みかよいつるべし氣體強大なるものは大服一
小児の薬一服は五分より一々五分より是又小児の
大小をわけて増減とて
大人の利薬を費するに水を多く煮六一盞よ水
を多く申大抵中々五分より六十分五分より五分

盞の量を減除してあれきより一服の大小
よ強弱にて水を増減とて利薬は一服よ一盞
申入て薬きたる或るくは熱と多くたてて火
を以一盞よ一盞よ二盞よ三盞より一盞よ
盞後とて一盞よ一盞よ二盞よ三盞よ四盞よ
病つて一日一服よ二服をよよつるべし大熱
ありて湯を病よはま宜よはつて多く用ひ
補薬を費するよ一盞よ一盞よ二盞よ三盞よ
を除くあれきよ五分より五分よ五分よ五分
一服の大小よ強弱ありて増減とて一虚人の薬

小張からよみあみ平文入る蓋を用白く一壯人の業
 大張からよみあみ平文入る蓋を用白く一張よみ
 二蓋入てあし炭を用ひ文火中しゆわうふれん
 つめて一蓋とくすすよみあ一蓋入て中蓋よせん
 お後合せし一蓋中とゆつとかけつるゆわうに
 空後よ三四夜よ熱張と補湯ハ一日よ一張あ
 けつえやとく人より朝夕ハつとくくある三
 夜のむ後日ハ二夜つとくえて張くくく人あり
 病人よよえくけつえとく人よハ朝夕ある一日よ
 一張程まよと張とく一食滞ある補湯のむ

けつえは食滞ゆつと後のむい

補薬ハ滯塞しやと一滯塞すよハ害ひり蓋
 利薬を張とくよりん公月ゆわうハ大利ありて
 氣塞くハ小利よとと一或薬をまけ生薬を
 点し補中益氣湯をのつとく用くこよハ
 乾姜肉桂を加へつこ由薛立舟が醫案よんり
 又麻子より附子肉桂をか加へ升麻葉胡を用る
 よ二葉とよよ火紙とよと酒とを炒用也
 傳成同乃流く又升麻葉胡を去て桂姜を加へ
 る中あり李時珍は補薬よか附子ハ加建ハ

其功とるごかりとつり虚人の熱かゝる病は業
力減めらるる方あるべし後よふ整り一分加へり
細きとと病疔よまじし壯人はいひる

身熱短小にして腸胃小なる人虚弱なる人の業は
服とるよ小服よ宜しされとも一女よりかぢるべし
らび身熱長大にして腸胃ひろき人つとる
業大服よ宜し

小児の業よあまらるる者ハ一服乃大小よりしてとる
あまらるる者ハ一服乃大小よりしてとる
乃きを除きてあまらるる利湯ハ一服よあ一盤

入七分に業一ニ二夜よ月由るといふべし補
湯よあ一盤中を月七かよ業一夜よ熱
服とるよ又すすめるといふべし或るすあも一盤入
中夜よ業一はめて月由へし

中華の法父母喪ハ必三年是天下古今の通法
なり日本は人の體氣腸胃薄弱なりは故よ古
法よ約廷より朝の喪を宣ち給ふ三年は喪ハ二
十七月之期乃喪ハ十二月なり是日本人の禀
賦の薄弱なりよより主官は考へて性よあ
る中乃あまらるる者ハ一盤よを世の儒者の日本は土

道をたうは古法よりとりて二季の喪致はた
人多くへ病して死せり喪はたへさうへ古人を
不孝とて是よしめてふも茶を用ふも亦同じ
ふ云の宜はたより考へて中夏の茶劑の事と
一紙と定むる宜しき一紙と一紙より二
ふよむりては内人の強弱病の種を以りて
多かありて一凡時宜をたうは法よかたへ
人のもち事かり俗俗よきさうして道理とさうへ
少人のまごかり

茶葉一服乃ち分量の大小用み此多かを定むる事

予養生よわらばして好事の備蓄率此病の
ことごとくとて今時本邦の人の稟賦を
からにたさうくいつくれあて宜うさへ
識の人博く古今を考へ日本此人の生れ付よ
態一付宜うあいてふ不及の差ゆく種を大小
に定むるべし

茶葉よ加つては味あり甘茶の茶毒をけり脾胃
を補ふは生薬の茶カハたぐりし胃を開く素の
元氣を補ひ胃をさへ葱白の風寒を散らす
を入門よとり又乾茶の小使と通し種氣を

おえらるるそのちびき氣つくと味とよくとく
 葉とてその茶の味と氣とよくとく
 世俗への振葉とて茶を袋に入れて焚湯に注いで
 若くしてそのみよりにありうごかき茶汁をかして
 服とてその自然の茶汁とてよくとく
 煎茶湯より茶力沸やとて補茶のきき
 法の如くお茶と熱とよくとく泡茶よ
 煎茶をへり袋のわくと布のわくと茶末のりて茶
 けよとてその清つとよくとくこれ書くと泡茶の
 事とてそのこととよくとく今これ付置よとて用と

可也古法よのりてとて付置よとて用と
 衛生論曰大抵散利之劑宜生補養之劑
 宜熟入門曰補湯須用熟利藥不嫌生
 法茶の熱とよくとく要決なり補湯の久くと熱と
 熱とよくとくよくとくよくとく補湯の利茶の生氣の
 つとよくとくよくとくよくとく病邪とよくとく
 補湯の熱湯とよくとくよくとくよくとくよくとく
 ゆるやふとよくとくよくとくよくとくよくとく補
 湯とよくとくよくとくよくとくよくとくよくとく
 ろとよくとくよくとくよくとくよくとくよくとく

さし茶力わつらばささで氣とさささ腹中津が食
を妨めて病がますさささつて害あり故に補
茶は用らばさささ制じつらさ醫は用やれ
てさささの庸醫は用やれつて清さ右
人の補茶を用らさささ邪をささ茶を兼用也邪
氣さささ補茶はさささり補は專一されどか
つてさささささのて害ありささ人の説かり
利茶は天張ありてさ火さささささささささ
速に效とささささささ邪をささささ局方曰
補茶の水をささささささ熱張して效とささ

凡九茶の性をさささささ功あざつてささささ
以下部とさささ茶又腸胃の換津をさささ
さささ茶の細末ささ茶と九茶ありさささ
細末はさささささ上部乃病又腸胃れるの
病よりさささ腸にさ茶ありさ功さささ中
下腸胃細末はさささ泡茶はさ腸よりさ
ささり邪邪霍亂食傷腹痛は用へて功は
入門よりさ茶を張らさ病とさささささ食後
さささの服と一対はさささのささ病中
にさささの食遠は張と病下部はささささ

多量に多く服して下にまきとべし病は股血脈
 よりのよの食より急て日中に宜し病骨髄よ
 ちよの食後服し宜し吐逆して茶を納ぐこ
 らよの食一とまひかつてふのむらゝ急よ
 多くのむらゝびも茶は飲法にまらんとむらゝ
 づづび

又曰茶を飲むるに砂礫を用ゆべしやとてのめこ
 又曰人ぞあつとべし云云の心謹慎する人よ廣し
 させしよし急擲率の者よ何ととべし
 茶と張とるよ丸薬に服し急とるよ湯を用ゆ胃

中よろくめんとせむ茶を用ゆ下部の病よ丸よ宜
 し急連の病つくと湯を用ゆ急いかりふハ散を用
 ゆ急連の病よ丸薬よ宜し急傷厥痛やよ
 急病よ急湯を用ゆ散茶も可也丸薬ハあふ
 一りの用いふ急ふらつて用ゆ
 中華の書よ茶劑の量散とるせんと丸よハ解
 散や毎張二よあ一急生薑二片米茶二枚
 して七分よつる急一日服よ二三張を用ゆ
 或方よりして毎張二水一急生薑六片茶
 一枚一急よ急して湯とる香積散を用

日よ二張とりりまれば一滓と一振りし一葉と
云多くハ滓と云とりり人參中氣胃湯中ハ每
服ハ女ハ一匙半薑七片烏梅一箇煎して
七分小いり滓と云參蘘飲ハ每服ハ女ハ一匙
半薑七片葉一箇六分ハ葉ハ蘘香四片
煎取毒ハ女ハ每服二女水一匙薑三片葉一枚
七分ハ葉ハ女ハ多クハ熱服一葉多クハ温服
と云とりり是皆葉劑一振の分量ハ多ク水を用
半と云とりり煎れハ熱湯甚濃をくぐり一日
ハ葉法の小振りして多クハ葉法より多ク

ハ小児ハハ水漬を用目見ハ女ハと云りて加減
と云とりり又小児ハ葉方一枚ハ女ハ八分葉して
六分ハ水と云りり葉方女ハ全ハ君ハ見方
後曰右坐ハ麻豆大一枚一枚ハ女ハ三匙半薑六片
葉三匙半一振と云ハ女ハ全ハと云ハ女ハ
中及ハ葉法ハ女ハ朝鮮人ハ多クハ女ハ中及ハ
葉法と云と云
宋の沈存中ハ筆談と云書ハ曰近世ハ湯と用じ
て黄散を用也と云り然レハ中及ハハ法と用
ハ女ハ一匙散の事筆談と云法詳ハハ黄散

へ茶を煎束と細布の茶袋のひらこよ入煎湯
 の沸く時茶袋を入るべく煮て茶汁おろす
 時茶袋あげ用るべく煎束れ散茶を煮るは
 黄散とあつあつとよ茶汁おろくおろくおろすは
 多くれを飲るる茶力つよく黄散とあつあつ
 よろくおろすは法打湯を煮して茶力つ
 よろくおろすは補湯よは法用るは黄散の法地
 よれおろすは法用るは黄散の法地
 甘茶とよは法用るは黄散の法地
 して他茶の物とせりごとくおろすは法用るは黄散の法地

たつを量のみか一可用と云人わりは言ひべ
 りか人れ稟賦とせり病を考へて加用おへ
 月々の人へ中華の人へり體氣弱弱ありて補
 せうけがて甘茶を煮て飲めよとよ茶汁
 榨り曰甘茶性緩なり多く用おへるは甘
 るはよく腹をゆるすとせり茶餅功ありは
 おろすも甘茶多けれど一茶餅とせりつとせり
 ごとく一茶力よとせりおろすは

生薑ハ茶一依よ一竹若風を散散の刺或は換
 茶よ二片を用おへし皮とせりおろすは

りたぬい月めべうづば或曰生薑補湯は六二利
湯は二三分嘔吐の症は六二分がべうと云生
なるか考をせり

第の大方をあげ月にしてさよと去一後よすか入用
なうつうえやうと云症は六二べう利湯は六二と用
べうと中夜の書は六二利湯と云方よりて本
と月由月半の人よ六二液とやと一加べうは加れ
茶力わうと云中夜食滞の症及茶のつえや
とと人よ六二と加べうとと肥胎肉もつえや
すと云は六二と一と云

中夜の手書病は必用病は必備并民要術農政
全書月令廣義多料理の法は多くのせ
つとまのころお月半の料理は夫よつとら皆肥
膏腹油膩の臭甘菜の饅をりそ食味は
ねと中夜の人へ腸胃を中稟賦つと云
よかり重味を食くとと満室を今世は満
末海中夜人も亦云と云月半の人へ仕整
てと云れ饅食と云と飽飽とと饅塞と
病おらるべうと云中夜人の饅食は淡くして
と云とと云れ肥饅甘菜の味と多く用と云

人老形を味く治るは... 良工...
 くるや中々風氣の大よ異るを又たりぬれ補薬を
 小根の甘草を減く... 凡薬...
 凡薬... 凡薬... 凡薬...
 今世の俗は利湯を...

中... 今世服と利湯ハ
 くるや中々風氣の大よ異るを又たりぬれ補薬を
 小根の甘草を減く... 凡薬...
 凡薬... 凡薬... 凡薬...
 今世の俗は利湯を...

たしあまきふと云とて幾許と云
串六樹はよきてよく熟し文のきつるが白くかり
か細き下る時とるべしきつるいりて熟せば皆紅
なる熟しとて肉たきしてわし文のあつかり
熟しとてざる時より目くらしくかりとるるさる
時じてやどべしきつるいりて熟せば皆わ
ちて茶浦及市屋よりか来熟せりてわし
あまきわし月むべし或樹とて熟し
さるるたきそわし月むべし皆樹より宅よ必
性へ熟しとてはの時とるべし

凡葉瓜脹して故久しく飲食せりては又葉カ
の甲よりあらはる肉は酒食せりし又葉そのんてね
じり叶とては次結じとて葉カめらる次結りて
害とて必戒むべし
凡葉瓜後より時とる夕の合をよりと結よつ
小みあるとてはあつちとて臭る獸かやす
みり肉ひかや物あつちとて物ねらる物
さ物一切の生冷の物生葉の熟せざる物あつち
けりりり物あわしく臭わしく味愛したる
物生る葉はりりる葉みわち砂糖のらたを

胃のぼたれ茶の多しは烟毒とて新しき烟葉多し
してわく世俗は茶湯と云ふ烟毒を以て烟氣を
茶罐と云ふ烟をすくくして烟氣をくわく形小切
がし

利業は久しく莫くはつては消導散散とて生
茶の力あり莫くつれどして飢を失はざる生茶は
多分根しく病をせむべしなると茶は生魚を
黄豆膏と煮るなり生熟のちるもこの種の飢を
失ふれば味よくしてつるをば飢を失は味わく
してはつるやとてつるが

毒よはつて茶を月々に必熱湯を用べくごとく熱湯
と月々の毒は毒を以て冷めて月毎べしこれ毒林を
記の流をりてをよんあまうり
食物の毒一切の毒よはつたるとは志は甘茶を
煮て冷やする時をうりてのびり温換を以
てのびだうりばらく竹の葉を加ふとす
毒をけと茶をくは冷水を多く飲べし多く吐便を
せしとすは古人の言ふ法なり知へし
酒は熱湯よ加つるよは茶は煮して後おぐんとする
時加ふば早く加ふはわく

腎ハ水化主らる又腎ハ府の精をうけておこすは
益造を主とて腎ハ益造り腎の病はどのも精
りる水化と相違ハ腎ハ補えんとて腎を
用べうは腎ハ下部はどのも腎ハ府の根を
腎氣虚をれど一方の根を喪らざるは
生らるハ腎氣をく保らる腎官をひして
生命を保らるて精氣を中すして茶治と
合治とて腎を補えんとする末より
東垣曰細末ハ茶ハ経絡よめらるは只胃中
麻ハ根と去る下部の病ハ大丸を用由中焦の

病ハ少とせと益と治らるよは極て小丸よとす
あて丸はくハ化しやとらに取らる糊と丸は
ちれく化して中下焦よめら
丸茶と益の病ハ細丸てやとらるよはく化しやと
とらるよは中焦の茶ハ小丸てやとらるよは下焦の
茶ハ大丸てやとらるよは生微論の益と湯
いらるよは用由散ハ益の病ハ用由丸ハゆるやとら
病ハ用由車東垣ハ珍珠囊よらとて
中焦の病も目ハ丸と同一茶を合らるよはゆるて
服の分量とらる各品の分量とらる

